英文學評論

英文学評論

福原麟太郎著作集

10

研究社

1969

福原麟太郎著作集 10
英文学評論
昭和四十四年三月二十日 印刷
昭和四十四年三月二十五日 発行
定価 一、三〇〇円
著作者 福原麟太郎
発行者 小酒井益蔵
印刷者 小酒井益三郎
印刷所 研究社印刷株式会社
発行所 研究社出版株式会社
郵便番号一六二
東京都新宿区神楽坂一の二
電話東京(二六九)四五二一(代表)
振替 東京 八三七六一
(乱丁・落丁本はお取替え致します)

© R. Fukuhara Printed in Japan

目次

英文学的諸問題

英文学の文学的特質……三
叡智の文学……一一
性格とヒウマーの文学……二一
諷刺とユーモア……三〇
英文学に現われた諷刺とヒウマー……五八

文学の二、三の形態

叙事詩……九五
エッセイ……一三一

戯曲……一五〇
一　戯曲を左右する力……一五〇
二　戯曲の長さと筋立て……一五五
三　人物の性格……一五六
四　戯曲の内容の種類……一六一
五　戯曲の線……一六三
演劇の彫刻化と絵画化……一七〇
ミルトン――近代への扉……一八九

文学の方法

芸術の鬼……二二七
文学的方法……二三三
現代文学研究の意味……二五七
文学の世界――漱石の『文学論』……二七七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

『文学評論』の方法……二八六

二十世紀英文学論

バーナード・ショー……二九九
バーナード・ショー——人間と社会のきびしい批評家……三〇四
ショー二題……三一八
雑誌クライティーリョンと主知主義……三二三
エリオットの同時代的記憶……三三三
モームの読者として……三三九
ハーバート・リード氏……三四一
ハーバート・リードの若い頃……三四五
ロレンスと人間性……三五三
ヂェイムズ・ヂョイス……三五七
一九二〇年代……三六五

一九三〇年代……三七二
現代文芸批評の出発……三八一
ケイムブリッヂ派……三九二
『新署名』の人々……四〇二

あけくれ

バイロンの旅の物語……四一五
英文学について（最終講義）……四六八
英文学学習の思い出……四六九
学問としてのハンディキャップ……四七二
文学的方法……四七四
文学と国境……四七八
詩歌の鬼について……四八一
言葉の表現の問題……四八三

英語教育の意味……四八六
表現の底に起った変化……四八七
英文学を友として……四九一
あとがき……四九七
掲載紙誌一覧表……五〇八
最終講義を行なう著者　対本扉
エムプソンと彼の学生達　対三七四
昭和十五年頃の文理大英文学教室　対三七五

英文学的諸問題

英文学の文学的特質

悲しみを刺戟する文学に国境はないらしい。しかし、笑いを催さしめる文学は国によってその種類を異にするように思われる。モリエールの笑いとシェイクスピアの笑いとは質の違ったものである。もちろんそれらの笑いの中の或るものは、十返舎一九と共通のものであり、式亭三馬にも見られるものであろう。しかし、一九にも三馬にも、日本人で、しかも江戸人でなければ味わい難い可笑しみを感じ得るものは、それが外国語に移され得ない事を肯定するであろう。もちろん言葉の洒落のごときが移植され得ない事は当然である。また特殊の風俗習慣をかせにした笑いが、そのような場面を外しては通用しがたい事も必然である。それは悲しみについてさえ言える。そのような比較的に機械的な笑いや悲しみについてでなく、笑いには特に、或る国民の持った体臭のごとき、生理的とも性格的ともいうべき笑いが、その国民に固有的に存在しているらしい。悲しみは、もっと普遍的で国民文学として特殊性が少ないらしい。

われわれはシェイクスピアの笑いを、果して真に心から享楽しているであろうか。たとえば、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

『ヴェニスの商人』の悲劇性に感服するごとく、その喜劇的部分に喝采を惜しまないであろうか。『ヘンリー四世』第二部における敗残のフォールスタフをいとしむごとく、その第一部の彼をしみじみと可笑しがるであろうか。『ウィンザーの陽気な女房達』におけるフォールスタフの可笑しさは、何かしらわれわれにとって、真の可笑しみを阻むものを持っていないであろうか。

『お気に召すまま』全曲を通じて、颯爽たる可笑しさとか面白さとかを『マクベス』の悲愴と等しく正直に味わえる人があるなら誠に羨ましい。同じ初期の喜劇の中で『夏の夜の夢』のボットムにはしかし、どこか親しみのある可笑しさを感じることが出来るといえば、それに同感する人は少なくないであろうと思う。問題はここから起る。

ここにわれわれは、親しみにくい可笑しさと、親しみやすい可笑しさとをやや区別する事が出来ることを発見した。まず『ヴェニスの商人』の喜劇部でも、フォールスタフでも、『お気に召すまま』でも、その可笑しさは、日本人の持っているネガティヴな可笑しさではなくて、ポジティヴな可笑しさであるように思う。彼らの喜劇は、ポジティヴな遊びである。スポーツのごとき遊びである。日本人が徳川期以来伝えられて来た虚脱の趣味、ネガティヴな遊びと、その可笑しさの方面を異にしている。彼らのは生活を一層強度に享楽するための遊びであり、われらのは生活から逃避するための遊びである。これを通人の遊びという。『お気に召すまま』の中に東洋的な懐疑家がいる。

ヂェイクウィズである。彼は己れの朋輩のヨーロッパ的、少なくともエリザベス朝人的遊びを理解する事が出来ない。そこで、彼は、四組の結婚が成り立ち、賑やかな総踊りの場面からひとり淋しく立ち去って己れの洞穴に帰る。われわれがもし正直に『お気に召すまま』を読めば、われわれにいちばん親しい人は彼ヂェイクウィズであるかも知れない。

ヂェイクウィズはしかし可笑しさとしてわれわれに親しいのではない。われわれに親しい可笑しさはボットムが持っている。彼は決して通人ではない。むしろはなはだ野暮である。しかしあの無知な、人のよい、それでいて才覚を自慢して出しゃばり、生真面目に大車輪に振舞う行為そのもののうちに、われわれはいとしむべき、人間のおろかさを発見する。このおろかさの可笑しさゆえにこそ、人間は愛すべきものであり、英国人もまた親しきこの世のわが伴侶である。これは決してポジティヴな可笑しさではない。人間の生活をますます旺盛にするための、またそれを更に強く享楽するための遊びの可笑しさではなくて、あらゆる人間からその智慧の衣をはぎ取り、栄誉の冠を脱がせて、素裸の人間の、ラムのいわゆる「誰でも少しずつは持っている」おろかさにまで人間を還元させてゆく、いわば「死」という偉大なる平等主義者のなすところと等しい力にこもる、諸行無常の可笑しさである。「われ愚者を愛す」というラムのヒウマーはここから生れる。

シェイクスピアの伝統はこの二つのもの、われらに親しめない可笑しさの一線と、親しい可笑し

さの一線と、二つの線に従って受けつがれているように思う。そしてここまで来れば可笑しさについてのみ、またシェイクスピアについてのみ考えなくてもよい。笑いについても悲しみについても、あるいは一般に英文学の嗜好としても、ポジティヴな、生活享受の文学系統とネガティヴな諸行無常の文学系統とがあると言って構わない。それは笑いについて最も著しい。ポジティヴな笑いはおそらく汎ヨーロッパ的であろう。しかしネガティヴな笑いは、かなり英国的であり、日本的である。ラムを最もよく理解し得る国民はチェホフを愛することを知っている日本人であろうと思う。英国人もまたチェホフを愛する。それと同じようにネガティヴな諸行無常の文学系統については、日本人と英国人とは、かなり親しい感じを持っていると思う。先日私は或る英国人から「しぶい」という事の意味を質問されて、とにかくそれはネガティヴな趣味であると答えたら、彼はたちまち了解した。

まず諸行無常の系統の英文学についていう。この種類の文学は、人生の諸行無常を自ら感じている作家および読者のものである。それは人生的であるゆえに道徳的でもあるであろう。そしてまたその無常を観じた文学であるゆえに一面において虚脱の安らかさの文学であろう。それは老年の文学である。もし老年というのが言い過ぎであるならば、悟りの文学である。おそらく随筆文学は、その意味でまっ先に諸行無常系に属する、老人の人間観を表現した文学である。チャールズ・ラム

は四十五歳を越さなければ味わえない作家であろう。

英文学はこの種の文学にはなはだ満ちている。日本の青年学生にとって、ヂェイムズ・ヂョイスとD・H・ロレンス以外、現代英文学が人気のない由来はこのようなところにあるのではなかろうか。オールダス・ハックスリーの名を挙げる人は、ハックスリーの中に知的な障碍物があることを自白しないでいられないであろう。その知的なものは青年を面白がらせる。しかし青年に親しませない。そしてここに次の問題への契機がある。

それはハックスリーの文学が持っているウィズドムの問題である。ウィズドムがハックスリーを特殊の作家にしている。ウィズドムの文学は諸行無常観文学への道程であると言える。またその一歩手前の中性的なものとも言える。必ずしもネガティヴではないけれども、いわば静かな人生観照の要素を多分に持った大人の世間智の表現である。すなわちウィズドムは人生の生活における思想と実践との調節者であるゆえに、それは経験の肯定者で、人生の悟りを多分に含んでいるからである。それは英国人のごとき経験と実際との信奉者にとって、最も喜ばしい贈物であるに相違ない。ハックスリーはそれを、その皮肉な諷刺的な形式において提供しているのではなかろうか。バーナード・ショーはその意味において、ハックスリーの先蹤である。最近ハックスリーが、「自己滅却」ということを主張しているときいて、まず思い当るのは、彼のウィズドムの文学が、かくして諸行

無常の文学に転移しつつあるのではないかということである。英文学の持っている奇妙な近寄り難さ、伯父さんの話のごとき分別くささは、このウィズドムの尊重ということにあると思う。

ウィズドムはまた常に均衡、調和、平静を好む。それは浪漫的な激しさや珍しさ、驚異奇峭の嗜好に反するものである。ニコル・スミス教授が『十八世紀詩の諸観点』において、奇もなく趣もなきごときポウプ時代の詩風の中に、安易平穏諧和を感じて、十八世紀詩は「大人の詩」であると論じているのは、はなはだわが意を得たものである。十八世紀詩はわれわれに最も近づき難い。しかし英文学の一つの文学的特性はかかるものの中に見られるのであると思う。

われわれはここまでの論述に一つの矛盾を批評することを見逃して来た。それはボットムやラムはわれわれに最も親しいものでありながら、現代小説の或るものや十八世紀詩は、次第にわれわれから遠ざかってゆくことである。諸行無常がウィズドムに還元されると共に、親しみと理解を失ってゆくことである。これは諸行無常がウィズドムよりも要素的で汎人間的であるに反し、ウィズドムは一層、その国民の特殊な生活意識や、風俗習慣に依存しているからであるといって説明することが出来る。その国民の特殊な文化的条件は、言語の特殊な感覚を別にしても、その国らしい文学をつくる要因であって、またそれはその文学をしてますます国境を越えしめない要因となるものである。

老年の文学やウィズドムの文学はそれでよい。反対にポジティヴな生活享受の文学の事を述べよう。これはもとより青年の文学である。『お気に召すまま』は日本人の生活の伝統にそのような笑いの世界が乏しいから十分鑑賞を許さないとわれわれは考えて来た。しかし、青年は常に汎世界的であって、伝統の羈絆を脱しているかのごとき心情を持つものである。青年の文学の系統は、日本の青年をとらえる事があるに相違ない。ただ、笑いの文学はいかに若くても、笑いが国民的であり国境を越え難い以上、シェイクスピアの笑いといえども、他国の青年には理解し難いであろう。他国に移植し得る文学は、笑い以外のポジティヴな生活享受の青年文学でなければならない。

英国の文学は、笑いも悲しみも、エリザベス朝すなわち、英国文芸復興期の文学において青年的であった。しかしその後、次第に老いつつあるように思う。ネガティヴな文学とはいわず、ウィズドムの文学において豊富であるように思う。あるいは、このポジティヴなる文学は、ネガティヴな文学と共に相率いてウィズドムの文学に合流して来、従って大人の文学になって来る傾向を持っていると思う。

ただ一度英文学が、エリザベス朝以後非常に若返ったことがある。それはロマンティシズムの時代すなわちバイロン、シェリー、キーツの時代である。英文学は不思議な青年の魅力をもって生産せられ、その魅力をもって読者をひきつけた。そして不思議な事には日本が英文学から最も多く学

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com